

落穂拾ひ



小 山 清

落 穂 拾 ひ

筑 摩 書 房

目次

わが師への書	三
聖アンデルセン	三七
落穂拾ひ	七三
夕張の宿	九五
朴齒の下駄	一二三
安い頭	一四七
櫻林	一七九

装
幀

吉
田
健
男

わが師への書

それは一冊の古ぼけたノートである。表紙には「わが師への書」と書いてある。あけると扉にあたる頁に「朝を思ひ、また夕を思ふべし。」と書いてある。内容は一人の少年が「わが師」へ宛てて書き綴った手紙の形式になつてゐる。これも青春の獨白の一つであらう。以下その中の若干をこゝに抄録する。

先生、僕、ふと思ふのですが、先生は烏打帽がお似合ひではないかしら。なんだかそんな風に思へてなりません。唐突にこんなことを云つて、可笑しな奴だと思ひですか。でも、僕、いつも先生のことを想ふときには、先生はきつと烏打帽が似合ふに違ひないと獨斷してしまふ

のです。鳥打帽の似合ふお年寄り、僕好きです。僕はいまとても嬉しいのです。到頭先生に話しかけることが出来たといふことが。僕は至つて小膽者で人と朝晩の挨拶を交はすことさへ満足に出来ない奴です。先生だからこそ、しよつばなからこんな風に始められたのです。僕は先生には何んでも聽いて戴けるやうな氣がします。僕はみんな話します。僕がどんな奴だか、追々お分りになるでせう。

中學校の入學試験の際、口頭試問で將來の志望を問はれた時、醫者になりたいと僕は答へました。家の親戚に親切なお醫者さんがゐたのです。僕は子供心にさういふ人になりたいと思ひました。死んだ母もそれを望んでをりました。その後教會に行くやうになつてから、牧師になりたいと願ふやうになりました。信仰を失つてからは小學校の先生にならうかと思つたりしました。いまは、……無能無才、たゞこの一筋につながる氣持です。邊幅を飾らず、器量爭はず、人を嘲はず、率直に「私」を語る心こそ詩人のものだと思います。僕の好きな一人の詩人の名を云つてみませうか。ハンス・クリスティアン・アンデルセン。

死んだ母は僕に身分に不相應な小遣ひをくれたものでした。僕はろくに讀みもしない癖にい

ろんな本を買つたものでした。アンデルセンの自叙傳の英譯本もそのうちの一つでした。僕はおぼつかない語學の力で讀んで行きました。表紙は淺黃色で、まん中にアンデルセンの首があつて、そのまはりに天使や動物や花や玩具の繪が一ぱい描いてありました。背は濃い綠色で上の方に金文字で“*Andersen by himself*”と印刷してありました。小型のいゝ本でした。母の死後僕はそれを他の本と一緒に賣り拂つてしまひました。僕はいまひどく惜しい氣がしてゐます。……あの本があつたらなあ、あの可憐な、慎ましい魂は僕の心を慰め、勇氣を與へてくれるであらうに、一刀三禮、僕は心を籠めて譯してゆくものを。最初の一頁はいまでも暗誦してゐます。アンデルセンはその生涯を綴るに際して、かういふ一行からはじめました。

“*My life is a lovely story, happy and full of incident.*”

「私の生涯はひとつの可憐なお伽噺です、幸福な、そして思ひ出多い。」

僕の行末がどうなろうと、わづかに彼に倣ふことを得、一篇の貧しき自叙傳といくつかの *fairly-tale* を生涯の終りに遺すことが出来るならば！

醫者、牧師、小學校の先生、……思へばいぢらしき限りです。僕などが人の爲に何を盡せるものですか。僕の心の何處を探つてみても、僕が何かを爲たといふことの證は見出し得ますま

い。僕はいままで何ひとつしたことがないので。親に傳づいたこともない。師に仕へたこともない。友のために圖つたこともない。手紙ひとつ心を籠めて認めたことはないのです。生來拙いといふだけならば、自ら慰めましょうものを、人よ憐れめ、僕には誠がないのです。僕があゝのイエスの譬話にある怠惰なる下僕に自らを擬して、「自分はもてる一ミナをもとられてしまつた。」と云つたとしたら、それはあまりに愚かなことでせうか。僕のやうな者にも、自分の若さといふものが、まとまつて胸に浮んでくるやうな期が來るでせうか。來し方の輪郭が自分でふりかへられる齡をもつことがかなふでせうか。

先生、僕のやうな者でも詩人になれるでせうか？

先生、今日僕は家の者と大喧嘩をやつてしまひました。僕は祖母の背中をどやしつけました。なに、つまらぬことからです。祖母が死んだ母の惡口を云つたからです。祖母が悲鳴をあげたので、兄が飛んできて、兄と僕は掴み合ひをしました。果は近所の人達が出てきて僕達を止めました。實はそんなに珍しいことでもないのです。僕は時々やらかすのです。近所の人達にも大分お世話になつてゐます。この近邊では、僕はある種の通り者になつてゐます。兄はまた孝

行者の名を得てゐます。事實兄は孝行者なのです。

先生、へんなことを伺ふやうですが、先生の星廻りは何んですか？ 僕は亥の生れです。亥

ノ八白、これが僕の運の星です。なにやら語呂が藪井竹庵に似て、昔の醫者の名のやうですね。僕の本名の弱々しげなのにひきかへて、なんと惡びれぬ面魂をしてゐることよ。わが運勢よ、竹庵先生が治療の手腕に似て、強引に逞しくあれ！ 人は僕のことを「ばか圖々しい。」と云ひます。「さつぱりお感じがない。」と云ひます。僕も自分に云ひます、「お前は猪ではなくて、豚だ。」と。僕はなんとも臆面がない。誰にでも見つける、しをらしさといふものを僕は持ち合せてゐないかも知れません。恥知らずになると極端に恥知らずになります。さういふ時、僕はどんな侮蔑の眼にもたじろぎません。名は體を現はすと云ひますが、亥ノ八白とは僕にしつくりはまつた名前かも知れませぬ。實は僕、氣に入つてゐるのです。でも、先生、いま僕はたじろがないどころではないのです。いま僕は人にうしろ指一本さゝれたたくなく、陰口一つきかれたくない氣持なのです。神妙に暮したい氣持で一ぱいなのです。おとなしい、内氣な、女の人から同情されるやうな、そして同じやうに内氣な心の娘からそつと思はれるやうな、（先生、笑はないで下さい）さういふ若者になりたい、そんな氣もしてゐるのです。なんだか、ひ

どく引込み思案になつてしまひました。もともと僕は意氣地なしなのです。人と和解するためならば、僕はその人の足の塵をはらふことも辭しないでせう。

僕はすべてに誇りが持てないのです。自信がないのです。

僕は現在二階の二疊の部屋に寝起きしてゐます。父の稽古部屋の隣りです。(僕の父は淨瑠璃のお師匠さんです)母の箆笥が置いてあり、僕のものでは小さい机が一つあるきりですが、それに僕を加へると部屋は一ぱいになつてしまひます。夜僕はこゝに蒲團を敷いて眠ります。結構寝られます。こゝで僕はわづかに夜の時間を樂しみます。稽古の客の歸つた後の二、三時間を。調和ある時々。本を讀んだり、先生とお話しをしたり……。

綠雨はこんな手紙を書いてゐますね。

「さうだ、こんな天氣のいゝ時だと憶ひ起し候は、小生のいさゝか意に滿たぬ事あれば、いつも綾瀬の土手に參りて、折り敷ける草の上に果は寢轉びながら、青きは動かず白きは止まらぬ雲を眺めて、故もなき涙の頻りにさしぐまれたる事に候。兄さん何して居るのだと舟大工の子の聲を懸け候によれば其時の小生は兄さんに候……。」

今日はいゝ天氣だつたので、晝飯を食べてから、堀切の方まで散歩しました。菖蒲園なども開いてゐて、遊山の人の姿も見られました。小菅の刑務所の見える堤に、遊山の人からは少し離れて、仰向けに寝て休みました。浅草の方の空に浮んでゐる氣球廣告を眺めてゐたら、頭のわきに立つた人がありました。兄さん何して居るのだ？ 巡査でした。不審訊問なのでした。

僕を不良とでも思つたらしいのです。「女子供が遊びにくるので、悪い奴がくるといふ話なんだが。」こんなことを云ひました。僕は水神にゐる親戚の名も告げました。すると「無心にでもきたんぢやないのか。」と云ひました。立ち去るきはに「自分でもへんだと思はないかい。」と云つて、さげすむやうな笑ひを見せました。それは自分の思ひ過ぎしを辯解するものゝやうにも、また僕を憫れむものゝやうにもとれました。僕は吐胸を突かれる氣がしました。僕は自分のなりをかへりみました。僕はふだん大抵中學時代の制服を着て、朴齒の下駄を履いてゐます。大して胡散臭いこともないぢやないか、と自分に云つてみました。

でも僕はどこかへんなのですね。人相もよくないのですね。僕は前にも咎められたことがあります。浅草公園で人にまじり、活動館の前に立つて陳列の寫眞を覗き込んでゐたら、その向ひの交番に呼び込まれましたつけ。僕にはいつの頃からか、活動館の陳列の寫眞を見ると、

憑かれたやうに見入つてしまふ癖がついてしまひました。放心してゐて掏摸に袂を切られたこともあります。また本屋の店頭で立ち読みをしてゐた時、知つた人に肩を叩かれたことがあります。その人は云ひました。「そんなに睨みつけてゐたら、本に孔があいてしまふぜ。」活動館の前や本屋の店先に突立つてゐる時の僕の姿は、人が見たら、随分みすばらしく、へんなのかも知れませんか。

巡査が去つてから僕はまた堤にしゃがんで、水や蘆を眺めながらぼんやりしてゐましたが、だんだん氣持が減入つてきました。そして憤ろしさが込み上げてきました。いまのさき巡査に對してはどんな感情も抱かず、素直に應へてゐたのですが、そのことがまた堪へられない氣持でした。自分はふだん理不盡に辱しめられることが多い……僕はこの時もまたさういふ、そしてそれはもう巡査を對象としたものではない感情にとらはれました。そして果は、自分は駄目だ、さういふ已に返る無力感をまたも堪へねばなりませんでした。僕は參つた氣持で歸途につきました。かりそめの不審訊問が僕に毎度の憂鬱を呼び起したのです。

堀切橋を渡つて鐘紡のあたりまできた時には、僕の氣持も少しなほつてきました。友達が欲しいといふ思ひが胸に湧きました。すると僕の氣持は吐け口を見つけたやうにその思ひに注が

れました。友達は持てるぞ、友達は持てるぞ、そんなことを思ひ、心は楽しくさへなつてきました。白髭橋の袂でふと見かけた古道具屋で、僕は古ぼけた額を一つ買つて歸りました。その中にをさめてある複製の繪と、またその額の古風で單純なのが氣に入つたのです。繪は父と母と子を描いたものです。おそらく異國のすぐれた古人の筆でせう。そのことに暗い僕には何もわかりませんが。ある上流の家庭を寫したものでせう。壯年の父母と若い息子（僕より一つ二つ幼いでせう）を配した畫面からは、良家の行儀正しさとでもいふべきものが傳つてきます。威嚴に満ちた父、優しい母、そして二人の間に、父の、母の面影のしのばれる、初々しい感じの若者。靜なもの、正しいもの、暖いもの、優しいものが感ぜられます。その時の僕の和んできた氣持はこの繪に惹かれたのです。値段も安かつたので買つて歸りました。簞笥の上に飾つてあるのがそれです。さきほど兄が見て「何んだい？」と云つたので、「外國のさる由緒正しい家族の繪だ。」と云つたら、解つたやうな顔をしてゐました。

今朝起きぬけにわが家の新聞をひろげたら、運勢の欄が眼につきました。

八白 朋友を訪ねて吉あり。

樂しき一行、これを見て訪問の心を起した人もあつたことでせう。しかし僕には訪ねる友もありません。圖書館へ行けといふほどの辻占かも知れぬ、しばらく御無沙汰してゐるから、僕はそのようなことを思ひながら、新刊書の廣告など見て行きました。あの短かな紹介文といふものには、ふしぎに惹かれますね。著者が力量、精進のほどを傳へて妙、まあそんな氣もします。

著者の言葉の引照してあるのもありました。「余は正しき良心と誤りなき反省とをもつて、この書を綴つた。」どうも自分には刺戟が強いと思はれました。「正しき良心」と「誤りなき反省」、僕は廣告面を眺めながら己の無爲が省みられ、どの書物もが僕に向つてさう云つてゐるやうに思はれました。なにかとりのこされたやうなさみしい氣持になりました。青春むなしく逝くを悲しむ。さうした感情が、呪文のやうにも、また悔恨のやうにも、苛立たしく、切なく胸のうちを通りぬけて行きました。朝飯を食べながら、僕は自分の貧しさを吞み下す氣持でした。そのとき、ひとひらの風の便りが舞ひ込みました。しかも水莖の跡すなほなる玉章。御披

露します。

「この朝夕を如何にお暮しですか。またひどく屈托なさつてゐるのではありません？ 貴方は御自分でお考へになるよりは、ずっと自由な生れつきなのに、なにかといふと考へ込んでおしまひになるのね。屈托げな御容子が見えるやうだわ。貴方の御機嫌をとつてくれる人は、誰もゐないのですか。私だとて、優しさとお世辭は持つてゐますわ。でも、私は辛抱づよいの。遠く見て、いつも幼い心で歩いて行きたいのです。獨り屋根裏部屋に住んでゐたアンデルセンの許へ、夜毎その窓邊に訪れて、さまざまのことを語り明かした、あの月、あれは私。私は貴方の不器用な天使。貴方のよろめく姿と私の心と、なんとよく似てゐること。でも私はなによりも貴方の聲がききたいのです。どこまでも自分の人生を語りつゞけて行く貴方の聲がききたいのです。沈黙つてしまふやうではいけません。いつでも自分の心を語れるやうでなくては。生活に臆病にならないで。幼いハンスが獨りで世の中へ出て行つた時に、どんなに素直で勇敢であつたかを思つて下さい。貴方が心さみしく助力といふものを欲しいと思ひになつた時には、私のことを思つて下さつてもよろしいわ。貴方の志を噓はない者が、貴方を疎む心になど決してならない者が、一人ゐることを思つて下さい。あのね、いつかきつとお逢ひ出來ると思